

霊の故郷

定善義に曰く

「帰去来。魔郷不可停。眩劫来流転六道尽皆逕。

到处無余樂 唯聞愁歎声 畢此生平後入彼涅槃城。」(善導大師)。

(読み方) 帰去来、魔郷にはとゞまるべからず、眩劫よりこのかた、六道に流転して、悉く皆へたり。到る処、余の樂なし、ただ愁嘆の声を聞く。この生平を畢えて後、彼の涅槃の城に入らん。いざいなん、魔郷には停るべからず。

どこから来たのか?……どこへ行くのか?

今まで何をして来たのだろうか。

考えねばならぬ時が来た。悩ましい。苦しい。そして寂しい。

どこからともなく、呼んでいるような気がする。

誰がよぶのか。狂えるような、やるせないような涙のよび声。その声が聞こえはじめると、一層あたりの様子がはつきりしはじめる。

おゝ見よ! こゝは魔郷ではないか。今まで見ていた様とは全く異って見える。群賊が、悪魔が、悪獣が、自分をとりまいている。あたりは真つ暗だ。

「おゝ久遠の愛児よ、かえり来たれ。そこは魔郷だ。真実の国にかえり来たれ。我はまことの親であるぞ。」

いよゝゝその声のはつきりする。けれども不思議なことには、その声の主の姿が見えない。彼は手をあげてその姿をさぐったけれど、いくらみはつてもその姿が見えない。しかしその声は痛々しくも心の扉を打つ。彼は今までこんな權威のこもった声を聞いたことがない。

「久遠の愛児よ。汝は気がついたか。汝のなせる一切は、今まで愚かにも虚偽ではなかったか。さ迷えるものよ。我は汝の親であるよ。一念一利那も親は汝を忘れてはいなかった。」

むせぶようなその声、切々と涙ににじむその招喚の聲が、魂の底を貫いた。

「み親よ。おゝ、み親よ。私は一心にみ親に合掌をささげます。」

彼は立った。不思議に足に力がこもる。

あゝ戦慄すべき魔郷なる哉。戦う声、狂う声、怒る声、泣く声、裁く声、死の悲鳴、業火が天をこがす魔郷だ。とゞまってはならぬ。

流転

「眩劫よりこのかた、六道に流転して、悉く皆へたり。」

あまりに長い旅だった。天上の甘い夢を見た日もあった。しかしそれも消えた。業火燃えさかる地獄の火に焼かれて苦しんだ日も長かった。戦いから戦いの修羅道、浅ましい畜生のような日、食うにも困る餓鬼道の辛惨、かくて我は地獄も、餓鬼も、

畜生も、修羅、人間、天上と六道輪廻もつぶさに経た。今という今、流転輪廻の相が知られた、苦しまぬ苦とてはなく、経ぬ里とてもない。

胸に手をやって、じつと考える。現在のこの一念を通して、過去が思われる。そうだが、今日や昨日からの流転ではない。そこに初めもなく、そこに終わりもない。何という愚かであろうか。何が故に苦しいのか、それさえ考えずに、ただ苦しんだ。

「汝は今までその苦から逃避しようとした。それが汝をより大きな苦惱へつきおとした。汝は時に、苦惱を安価な享樂によつてまぎらかそうとした。しかし一つの享樂の後には二倍の苦惱が待っていた。やがて汝は神をつくつた。そしてその神に祈願を捧げた。それもまた見事裏切られた。

やめよ！ 苦の根源をつきとめよ、逃げるな、かくれるな、一切を背負つて立て………。」

又しても権威ある声が心の扉をうつ。

愁歎

「到るところ、余の樂あることなし、たゞ愁歎の声のみぞ聞く。」

彼は彼の周囲の声を聞いた。愛欲と名利を中心にして、無明のうづまきが見える。

夫に裏切られて泣く妻、子に棄てられて悲しむ親、親をなくした孤児のうれい、病床に横たはる者のうめき、牢獄に囚われた人の涙の声、戦に傷ついた男の悲憤。かくて彼の耳をうつ声は、あはれ愁歎の声のみであった。

彼は今まで、この声、一切群生のこの声に耳をかたむけなかつた。不思議にも彼の心は今、一切人の声にひきつけられる。

大聖釈尊は小鳥に獲られた小虫の上にも悲愁を感じ、聖親鸞は、悪逆の極重悪人の上にも、おのれを見た。

彼は彼の上にむけられるあらゆる苦惱の刃を受けまいとした。しかし彼は合掌して立つた。

彼は考えた。彼が一度瞋恚の炎を燃やす時、その火炎は三千世界を焼きつくして火の海とする。一切群生はその中に焼かれ、一切の如来神明をその中に立たしめる。一切群生が苦しむのは彼の責任ではないか。彼はあまりに高かつたことを知つた。

「汝愛子よ！ 我は汝の苦惱罪惡の火の中に誕生した。我に苦惱あることなし。汝の苦惱がわが苦惱であるぞ。」

又しても見えざる親の声が聞える。親は我とわが燃やす火の中に立ちます。彼の心は根底からつきくずされる。見よ彼は一切群生の底に沈んだ。

一切の偶像をひきちぎり、あらゆる功利心を棄てて、たつた一人合掌したその相の上には、彼が親とよんだ、絶対者が、彼自身になりきっている。

真の生命は解放されたのだ。真実のみ国の扉は彼の合掌によつて開かれた。広大無辺なる光明界は、この生死海底より開かれた。

今は、彼は自分ひとりが楽しめばいゝという利己主義者ではない。あたかも一切人の苦惱を一人で荷負つたようである。光という光、真実という真実は彼の上に注がれている。

暗と光との一致、如来と煩惱との一体。
彼は今全宇宙の中心に立てるものの如くである。

故郷

すべて故郷さして帰るものの心はおどる。まだ見ぬ真実の国の扉が彼の前に開いたのだ。彼の心は限りなく歓喜におどる。真実の国への大道が見える。彼は真一字にこの大道を歩む。

彼の現実は何を根底としているか。彼の現実はいかなる指導原理によつて創造されつゝあるか。現実が指導されるためには「彼岸」に最高なる理念界を要する。現実が彼岸にむかつて動くためには、そこに力を要する。彼岸と現実の力とは本質的に二つのものであつてはならぬ。彼岸より現実、現実より彼岸に、この二つなる世界の一なる相こそ、真実なる霊の故郷さしてかえる彼の生活相であつた。

「この生平を畢へて後、彼の涅槃の城に入らん。」

涅槃の城！ それは一切の光という光の根元であり、真実、清浄、智慧、慈悲、仏性、真如、一如、寂靜、………聖なる活動の源泉であり、一切群生のかえらねばならぬ生命の故郷である。

されど彼は今地上にある。地上の日々が彼の生活にあつては、決して無意義ではない。

見よ彼は彼岸を現実の一步に実現しつつ不退転に動かされる。

彼は彼の日の一つ一つを忠実に果たしてゆく外に何の変わりを持たないようだけれど、彼の真生命は涅槃とその本質を同じうしている。

彼の生活は以前と少しも変わりはないけれど、「聖業へ参加」せる者の尊重がある。忠実に一切を背負うて地上のつとめをはたしてゆく。聖き世界の大衆たちは彼を百重千重圍繞して守護せられる。彼は決して私有の彼ではなくて、法界公有の彼である。彼の籍は涅槃の城にうつされてある。

彼は愚者であるかの如く自覚しつつ、やはり地上の今日に全体を投げ込んでゆく。霊の故郷からは依然として彼の上に一切の光と恵みが与えられる。彼はただ一切をまかせきつて生きてゆく。

人間として

人間成就を忘れて

大臣、大将、小使、車夫、奥様、下女……人は生れると社会の中に投げ出される。そこに社会的な立場と評価を与えられる。大臣は尊いが小使は卑しいという考え、大学教授は高いが小学校教師は低いという考え、果して令嬢は尊くて女工は卑しいか。富と地位と名誉、それだけが人生であると考えられるのも無理はない。富が悪いのではない。地位や名誉が悪いのではない。人間それ自身の価値よりも、人間の皮相につく社会的価値の尊重される世界では、やがて人間としての成功よりも、市場の価値を高めることに技巧策略をこらす。大臣の地位に執着して、人間として失敗する人がいる。代議士として当選せんがために、人間として墮落する人がある。

地位を有する者が人間成就の道を忘れてその地位、その名誉を保留することに執着して、責任を感じず、徳義を軽んじ、無明分別の邪智によって、一身一家の栄達に恋々とすれば、彼は高きが故に、その恥辱も大である。

策略的智によつて高き地位を得たり、生れながらにして富める者はあるが、その地位を徳をもつて輝きあらしめる者は少ない。

大臣となつてその徳が大臣に相当したか。華族となつてその栄爵をはずかしめなかつたか。

我らは常に我らが受けている社会的尊敬と待遇とが、我に相当するかを考えた時、何時も過分であることを考えて感謝すると共に懺悔せざるを得ない。

4

最後の一人の上にも

大臣も人間であれば車夫も人間である。人間を尊重する世界では一切が尊い。百姓も尊ければ官吏も尊い。官吏が尊いとは、決して官吏だとして威張れということではない。

積尊は皇太子であつたことをもつて、御自身の尊厳を叫ばれたのではない。赤裸々に一切の立場と社会的価値をとりさられても残る本質的価値を発見せられた。したがつて積尊は、一切人の上に平等に、絶対の価値を認め、導いて、この価値を自覚せしめた方であつた。積尊の前では誰でも捨てられなかつた。たとえ仏敵をするものをも同一の慈眼で見られた。我が名字さえ記憶できぬ愚者ですら、悟りを得て尊者の列に加わる。

価値生活、それは人間にあたえられた唯一の問題である。価値が自覚された時、人は貧しいことも厭わず、迫害も忍従し、時には牢獄をもさげない。人生生活の中心はこの価値の発見であるといつてもいい。

私は今、岡山市の西実寺の昼の講演をすまして街を歩いていると、両膝以下をなくした老人が両手に下駄をはかせて、地上を匍つているのを見た。彼は物乞いをしてるのである。その側を幾台となく自動車が行く。私の頭の中には種々なる人の相が浮ぶ。御殿のような邸宅に堂々たる生活をする紳士、今は時めく会社の重役、それらと思いくらべた時、この哀れな不具者には、生きていい価値があるのだろうか。

大地の上から、賢者から賢者からとり除き、善人から善人からとり去って、残った最後の一人、その最後の一人、それが抱きしめられる世界はないのであろうか。その人の上にも発見せられる価値生活はないであらうか。

釈尊はこの世界を開いて下さった方である。親鸞聖人は、いかなる悪人をも捨てなかつた。如来をそしり、疑い、ひいて弓矢を向けてくる者の上にも真実の如来は働きたもうを信じられた。最後の一人の上にも自ら自分のすがたを感じられた。そうしてこの最後の一人の上にも盛られてゆく大道を、南無阿弥陀仏の中に見出された。

私がさる青年団の講演から帰る時、私を乗せて走っている車屋さん、次のように語った。

「先生、今日は有難いお話を聞かせて下さいました。嬉しう聞かせて頂きました。」

「草屋さん、あなたもこうした世界のことを考えているのですかね。」

「はい、私はどうした宿善やら、仏教のお話が一番すぎでございます。今日も校舎の外で聞かしていただきました。貧乏者で、こんな仕事をさせて頂いていますが、幸の身上でございます。」

とて彼は念仏を申して走る。

「先生、一寸お蒲団の後をござらん下さい。」

手を入れて見ると、「法の園」という宗教雑誌が出た。

「皆はお客様をお待ちする間が長いと申しますが。私のためには何時も時間が足りません。この雑誌を毎日読まして頂きます。」

私は思わず、合掌したい心持ちにすらなつた。

この男の皮相の価値は車屋であるけれど、その本質的価値は、尽十方無碍光如来であらねばならぬ。

彼の念仏の根底は尽十方無碍光如来であり、彼の霊の本地は極楽浄土である。

絶対的価値

米一升の価は三十五銭である。重役の価値は年俸一万円である。大臣の価値は親任官である。小使は月給三十円……それは人間の作つた相場である。決して本質的価値ではない。

合掌した釈尊の目には、米一粒の価が三千世界より重かつた。三十五銭の六万分の一が一粒の価ではなくて、絶対価値をもつていたのであつた。

皮相の世界をさまよつて、眼が外にばかりついている時、我らはこの人間の作つた価値のみを追うて、笑つたり泣いたり、得意高慢になつたり、卑下したり、悲観したり、失望したり、呪つたりする。

本質の価値に目覚めた者は、どんな世界におちても、微笑んでおる。

仏教にいう菩薩の大道とは、人間のたつた一つの真実の道である。

一切群生が悩んでいる時、一人自分の樂を求めたり、自分の榮達に高慢したりする心は菩薩心の中にはあり得ない。

限りなき光を背景に、限りなき苦悩の生死海に活動する。最後の一人をすら棄てない所に大悲が動く。

「不さんは刑務所を参観して帰って語った。

「鹿島刑務所にも死刑囚が数人いるそうです。それらの人には教誨師が宗教の話をする。そうして信仰に生きるまでは、決して死刑にしないそうです。」とて死刑に關する色々なことを語っていた。

日本の大御柱である「天皇」のみ心の中にはこの最後の一人をも棄てられない御仁慈が動いているのではあるまいか、私は涙ぐましくなった。

もしこの最後の一人を問題にしない政治があるならば、それは天皇を冒瀆し奉る政治である。この心を失った教育があるならば、それは真日本よりは、かけはなれた教育である。

豚が死刑になるのも知らずに、聖者の如く落ちついている。貪欲の鬼が、黄金の中に、銅像のように落ちついている。そんな落ちつきの中で得意そうに、曰く、宗教とか道とか、それは弱虫の声だと。

大地の上を何が清めてかかるのか。時には一国の大臣より、名もなき老婆が大地の光ではないか。長者の万燈、貧女の一燈、長者の万燈必ずしも光でなく、貧女の一燈も時に永遠に輝く。

形よりも心、心の底に何が動く、人間として、人間として合掌の底に涙がにじむ。

一つがいの小鳥が時に一万円する。間もない内に十円に下る。小鳥の相場と人の相場、

我らは考える。

人間としてく………生きるとは何をいうのか。